

北タイ・ラフ族ローチョ村

—RTF プロジェクト

小 松 光 一

(大地を守る会・国際局顧問)

はじめに

このレポートは北部タイの山岳地域の小さな報告である。グローバリゼーションとボランタリーな活動についてまとめた。

グローバリゼーションは、「暴力」や「欲望」、「悲劇」や「喜劇」などを内包している。ボランテアは「他者からの審問」や「自立」といった内容と接点を持っている。もちろんこの小さなレポートはその全体を記録できない。ひとつの断面をさし示し、「自立」や「アグロフォレストリー」、「環境」といったものに接近するための一つの貴重な事例であると考えている。

小さな村と埼玉県の「ロータリークラブ」との5年にわたるコミュニケーションの記録である。

1. 北タイ・ラフ族ローチョ村の焼畑農耕

北部タイの小さな村。人口400人足らず、100戸ほどの村「バン・ローチョ」（以下、ローチョ村）。標高1,100メートル。およそ38年前にこの村は作られた。ほとんどの村民はビルマからの難民である。ビルマの軍事政権から逃げてきた人々によってこの村はつくられた。もともとは中国・雲南省にいた人々である。もっと大昔はチベットの中国寄りの地域にいたと思われるラフ族である。

チベット系の狩猟民族であるから羌族の流れだろう。「羌」は羊と人という文字の合成語であるから、山羊や羊などを飼いながら狩猟をしてきたといえる。ラフは中国語「拉祜（ラフ）：虎の肉をあぶる」という意味である。農耕は得意ではない。いわば彼らは歴史をかけて流浪してきた人々なのだ。戦乱に追われ奴隷狩りに追われ、逃げてきた。もちろん、ラフ族の国もない。それが38年ほど前にタイに定着したのだ。平地にはタイ族がすでに定着していたので、彼らは先祖たちがしてきたように、山岳地帯の農耕的には条件不利地に定着したのだ。狩猟の好きな、農耕の不得意な、条件不利地に住む人々だ。日本のイメージでいうと平家の落人村とでもいえるだろう。

この村は、村人を引き連れてきたリーダー ヤバ・ローチョの名をとってローチョ村という。もちろん、山をひらいて水田などをつくる技術はないのだから焼畑農耕という古典的なやり方を選択した。着のみ着のままやってきた彼らは、おかぼ（陸稲）や豆のタネなどを肌身離さず持ってきた。ヤバ・ローチョはこの村を拓いたとき、村人たちにほぼ600ライ（1ライは16a）の森を守れと言った。

この村の焼畑は、農耕3年、休閑3年というサイクルで成り立っている。つまり3年間作物をつくり、3年間休閑してまた戻っていくというやり

<図-1> ローチョ村の焼畑農耕基本モデル

年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	面積
1年め		木を切る		火入れ			○	おかぼ	□				5ライ
2年め		木を切る		火入れ			○	おかぼ	□				5ライ
3年め		木を切る		火入れ		○	トウモロコシ			○	大豆または赤豆	□	5ライ
4年め		その後放棄（休閑）											5ライ
5年め		その後放棄（休閑）											5ライ
6年め		その後放棄（休閑）											5ライ

かたである。基本型は<図-1>のとおりである。

①おかぼ→②おかぼ→③トウモロコシ・大豆・赤豆→そして④休閑→⑤休閑→⑥休閑、つまり6年間の農地利用である（6年輪作）。1ブロック5ライ（80a）をひとつのブロックとして、6ブロックをつくってまわしていく。全体は30ライ（480a）である。例年は3区使用するから15ライの農地を活用し、あとの15ライ（240a）は休閑する。これがこの地における農地活用の基本型である。

だが、実際にはそうはいかない。1995年当時ですら既に、ジャバ・ヤパは、①休閑5ライ、②トウモロコシ5ライ、③赤豆・大豆5ライ、④おかぼ3ライと、輪作はくずれている。30ライの土地が必要なところ、23ライしか持っていない。そのため、輪作は圧縮され、4年輪作にしかならない。もっと休閑が必要だとはわかっているが、農地が少ないから仕方がない。その結果、農地に無理がかかっていく。そのうえ、20年ほど前から、生姜を2ライほど作付けしている。生姜栽培は一気に地力を奪う。

リポ・ロチェは、①トウモロコシ3ライ、②赤豆・大豆5ライ、③休閑3ライ、④おかぼ1ライ、それに生姜3ライを作っていた。全部で15ライほどである。20年ほど前から、ジャバ・ヤパもリポ・ロチェも、換金作物としての生姜を導入していたのだが、それもまた農地に混乱をもちこん

でいる。生姜を1年栽培すると、5年や6年の間、連作できないからだ。

結局、ヤパやロチェは、もはや生姜を作れなくなり、10年ほど前から飼料用トウモロコシ（メーズ）の作付けを増やした。その後、この村の農業は変わっていった。かつて、トウモロコシは、せいぜい自給用か、あるいは、正月に食うための豚の飼料購入に足る程度の収量を見込んで作付けされていた。しかし、彼らは、赤豆もおかぼもぐんと減らして、飼料用トウモロコシ（メーズ）に、作付けを特化していき、焼畑が拡大した。

焼畑農耕は、乾季の終わり、2月～3月にかけて火入れを行う。「刀耕火種」である。刀で木を払い整理し、火を放つ。そして、雨季が始まる4月ごろに、種子をまくのだ。

考えてみれば、自給型の焼畑農耕であれば、半分を休閑とした場合、240a程度の農地で十分だ。日本の農地平均が100aとすれば、約2倍でしかない。そんなに大規模なものではない。つまり、自給をベースにする焼畑農耕ならば、決して環境破壊とはいえないのである。自給をベースに、休閑を確保した持続的な農耕になるのである。環境問題はその後やってくる。この焼畑が大規模にやれば、山を焼きつくす環境破壊につながっていくのだ。焼畑そのものに環境破壊はない。山に火を放ち山が燃えるという見かけが、いかにも環境破壊に見えるだけなのである。

もし、これを大規模にやり、休閑をなくし連作し続ければ、環境破壊になってしまう。この「大規模・連作」という経済過程のなかに環境問題があるのである。「大規模・連作」という欲望はどこから生まれるのか。それは経済過程という社会関係のなかである。

この経済過程はどこから生まれてくるのか、あるいは「大規模・連作」という欲望はどこから生まれてくるのか。もちろん、彼ら村民は、輪作を無視した焼畑は決してよくないことはわかっている。いわゆる先進国は、その問題を農薬というかたちで表面的に解決している。彼らにはそうした「技術」もないし、生姜や飼料用トウモロコシの価格からは、農薬を買う余裕は生まれてこない。彼らにとって、農薬の使用は不可能な技術なのである。古典的な輪作という形だけが、こうした山の農村を持続可能なものとする。今日の「南の途上国」の農民たちの運命、つまり、作れば作るほど貧困になり、土地を荒らし、ついには農業を放棄せざるを得なくなるという運命は、飼料用トウモロコシという国際商品（グローバリゼーションの）、あるいは生姜という国際商品の生産という経済過程の中から生まれてくる。「大規模・連作」という欲望など一瞬でしかない。

2. 飼料用トウモロコシ（メーズ）という国際商品

生姜も国際商品であるが、それはたかだかアジア規模、せいぜい日本の商社がすしの「ガリ」として使う程度のものである。例えば日本のすし屋の「ガリ」はなぜ無料なのか。お金を取る必要がないほど安く買ったかされるからだ。ところが飼料用トウモロコシは違う。世界商品として、アメリカなどの飼料用トウモロコシ地帯数千ヘクタールの農場で生み出されるものである。価格はキロ3～4パーツ（日本円にして10円程度）で国際価格と連動している。だから日本の畜産農民は、飼料

用トウモロコシはつくらない。アメリカから安く買えばいいのだ。飼料用トウモロコシは「メーズ」といわれているが、日本の畜産農民にとって、メーズは安く国際市場で買うものなのだ。

この村では、20年ほど前にはやった生姜は10年ほどですたれてしまっている。農地を荒らし、病気が多発し、金にはならない。いまやローチョ村に、生姜をつくる人はほとんどいない。そして、1960年代にタイの東北地方を中心に広がったメーズづくりに、村の人々の関心は移行したのだった。もちろんメーズは遺伝子組み換えの種子である。

村では、キロ3～4パーツ（約10円、2016年現在1パーツ3～3.3円）のメーズを作り続けている。タイ東北地方の農民たちは、メーズの粒を取るために人を雇う。だが、メーズからの利益は、その労賃程度にすぎない。ローチョ村の農民たちは、その手間賃を稼ぐために、自分たちでその作業をする。北タイの山の民は、機械化されたアメリカのコーンベルト地帯などの大規模農場と、手作業で闘っているのだ。そして、陸稲（おかぼ）や赤豆、大豆などの自給用作物を放棄した農業は、ひたすらメーズに特化し、大規模化していく。この10数年あつという間に山ははげ山になっていった。連作につぐ連作の結果、農地は荒れていく。地力を失い、病気が多発し収量は落ちていく。いまこの村の畑に育っているメーズは、細々として、か弱いものだ。収量も低い。このままではいけば、ローチョ村の農業はあきらかにダメになっていく。つまり、山の農地という唯一の資産を放棄することになる

彼らには山林農地の所有権はない。山林はタイの国家のものである。だから、1989年に施行された伐採禁止令が有効なのだ。こうした荒れた農地に対してタイの農林省は、「おまえたち大地を荒らしたな、それでは我々が木を植えて山を管理する」と言い出すのだ。こうして、山の土地は国に

奪われてしまう。もちろん、山の民には土地の所有権はないが、農地として使っていれば土地の耕作権は認められる。

この数年、ローチョ村では、「どうもメーズはだめだな、これではしょうがない、何とかしなければいけない」という声が出始めていた。だが、規模は縮小できない。どんなに安くても、規模を縮小すれば、収入は減る。現在、この村の平均年収はほぼ5万バーツ（15～16万円）である。彼らは「なんとか8万バーツ、できれば10万バーツになればいいね」という。せいぜいそんなものだ。一家で働いて年に日本円にして15～16万円程度なのである。

村民のジャロ（48歳）はいう。農地は30ライ（うち水田2ライ）で、メーズを20ライやっている（年4万～10万バーツ）。「あと4～5年でだめになるなあ」。

3. 浦和北ロータリークラブ

浦和北ロータリークラブはなかなかおもしろい。これまで5回から6回はこの村に足を運んでいる。今年の社会方針委員長は古澤建治さんだ。

ふつうロータリークラブは社会貢献を寄付という形式でやる。ロータリークラブは地域に一業種の人だけが参加できることになっている。いわば地域の経営者の集まりであり、経営者としてのアイデンティティをもとにして社会貢献していこうとする団体だ。寄付は単年型である。しかし、この団体は7年連続でこの村にかかわっている。

はじめは、1998年。この村出身のラフ族のリーダー ダイエー・セイリさんが中心となって進められたこども寮のプロジェクトに協力したことである。2年がかりで、寮にベッドと窓の網戸を寄付した。

当時、寮にはベッドがなく、こどもたちはコンクリートの上にじかに寝ていた。網戸もなかつ

た。「それでは寒いだろう」とベッドを寄付することにしたのだ。村には学校がなく、ダイエーさんは自力で寮をたて、村のこどもたちが政府の学校に通うシステムを考えていた。

ダイエーさんは1987年日本に来て農業研修で2年間学び、終わったときいくばくかのお金をもって帰国し、農業研修施設を作りたいと、1年間、バイクで村々を回った。村人たちは「まずはこどもたちがちゃんとタイ語の読み書きをできるようにしてほしい、そのためには学校に通わせたいのだ」とくちぐちに言ったのだ。彼らはラフ語しかできない。だから平地のタイの町に行ったとき、さまざまな差別を受けていた。「せめてこどもたちをきちんと学校に通わせてほしい」と。

だから彼は平地の町（メタム町）に自力で寮をつくった（1991年）。その後何度か建てなおし、現在は日本大使館の草の根無償援助で寮ができた（2007年）。ダイエーさんはお金をおしみ、ベッドはつくらなかった。できるだけ多くのこどもを寮に入れるためだった。

その間研修農場もでき（1992年）、ダイエーさんは民間・自前の研修農場の農場長になった。研修農場に関しては、宮城県角田市の「アジアの農民と手をつなぐ会」が協力し、日本の郵政省国際ボランティア貯金の協力を得て開設された。

浦和北ロータリークラブは、こうした経過とは少しスタンスのちがうかわりをしているようだ。浦和北ロータリークラブはボランティア活動であるが、彼らは地域の経営者の集まりとして「自立」をつよくダイエーさんに求めつづけていた。たとえば、2016年にローチョ村の村人を3人浦和の町に呼んだとき、驚くような提案をした。渡航費は古澤さんたちロータリークラブが持つ、「日本での行動費や滞在費用は自分でかせげ、彼らの農産物を日本にもってきて売れ、それで金をつくれ。販売に対しては協力する」と言ったのだった。「えっ農産物？」といった彼らに、「こ

んど我々がタイに行くから、俺たちも半分運んでやる」。

こうしてダイエーさんたち3人は「コーヒー」という自分たちの商品を、浦和の町に100袋もってきて売りさばき、行動費、生活費をつくったのだった。「自立」である。ボランティアは「かわいそうな村人を助けるためではなく、自立をつくりだすためにやるのだ」それが地域の経営者としての社会貢献にふさわしい、と古澤さんは言うのである。

4. RTFプロジェクトはじまる

ダイエーさんと浦和北ロータリークラブの古澤さんたちは話し合った。「このままでは、メーズ生産という農業形態には未来はない。なんとかできないだろうか？」。

そのときダイエーさんの胸にひらめいたのは、エッケーさんの実践だった。エッケーは早くから、生姜やメーズに依存せず、異なる作物を作っていた。①水田5ライ、②生姜1.5ライ、③10ライに永年作物のモモ、ウメ、ライチーなどを植え、そのなかにトウモロコシ1ライ、そして、4.5ライ休閑しているのだ。全部で、農地が15ライである。永年作物を混植することによって、休閑地を確保し、農業の持続性を確保しようとしていた。彼は2012年に亡くなった。

「焼畑を2ライほど減らし、そこにくだものなど永年作物を植えていけば拡大し続けた焼畑を少し食い止め、違う流れをつくり出せる」と考えたのだった。そのとき「コーヒーは有力な商品作物になりうる」と。

コーヒーやくだものが育つのに最低5年はかかる。その5年間は援助してほしい。5年経てば実績は生まれてくる。そしたら、その5年間取り組んだ村民たちは村の農業オルタナティブのモデルをつくれる。そのモデルがやがて村を変えてい

く。「なんとか5年継続して協力してくれませんか」、とダイエーさんは古澤さんたちに語った。

ロータリークラブ会長の任期は1年である。だから次年度の会長が、「今年はやめよう」と言い出せば終わってしまう。あるいはロータリーの会員から、「いつまでタイとやってるんだ、もうやめよう」という声が出れば終わってしまう。古澤さんたちは議論を重ね、「5年間はつづけてみよう。そこから、焼畑農業を変える方向性ができるかもしれない」という結論を出した。

そのプロジェクト名が「RTFプロジェクト:Return to the Forestプロジェクト」であった。プロジェクトの内容は浦和北ロータリークラブで確認され、ダイエーさんは、さっそく、RTFプロジェクトの体制づくりに取りかかった。2010年6月である。「照葉樹の森を守り、豚が堆肥を生み出し、コーヒーが育つ村をつくらう」という内容だった。「タイ国、緑化と養豚の複合経営モデルの山岳地帯農業をめざして」と付言された。ようするに、緑化と養豚をベースにして村の農業を変えていこうというものだった。

養豚は、うまくいけば回転が早いので、手取り早く収入を見込める。その間に、コーヒーやくだものをゆっくりと育てていく。くだものは、アボカド、ウメ、柿、スモモ、モモ、といったものだ。そこに永年作物のお茶が加わる。お茶は自然の山茶である。

村では、さっそく、コミッティの形成がなされた。①ジャット（村長）、②イエラミ（牧師）、③ゴアク（篤農家、他村）、④エモウ（篤農家、他村）、⑤ダイエー（北タイ研修農場長）の5名である。基本的な申し合わせ事項も作られた。①会計年度を決め、②1年間の成果を浦和北ロータリークラブへ報告する、③総会を年1回開く。総会にはRTFプロジェクトのメンバーだけでなく、ロータリークラブのメンバーも参加する。

こうして、ロータリー側のプロジェクトとタイ

側のプロジェクトが形成された。次のような資金をロータリー側が出す。①種母豚の豚舎の建設、②コーヒーやお茶、くだもの苗代、③雑木やチークなどの緑化に必要な苗の元手、④種母豚の育成費用やエサ代、⑤コーヒーや果樹の苗が育つ間、豚が育つ間の最初の1年間の労賃など必要経費である。

こうして、毎年5戸の農家をRTF農家（コーヒーや果樹・雑木による緑化と養豚に取り組む農家）として育成していく。5年間たてば25戸のモデル農家が育つ。彼らが地域のリーダーとして農業実践をしていくという内容である。

村では、さらに、①年1回、コーヒーや果物栽培技術の研修を行う、②年1回、養豚技術の研修を行う、③ロータリークラブへの報告のための研修会を行うことが決まった。初年度の予算は、25万2,100バーツ（75万6,300円）で、次年度以降は17万8,100バーツ（53万4,300円）という支援をロータリークラブが行っていくようにした。

そして5年間の月日がたった。2015年でRTFプロジェクトは終わった。タイ側のRTFは2020年まで継続する方向である。

5. 2015年、5年間のRTFプロジェクトが終わって

2015年9月でRTFプロジェクトは終了したが、村では、2020年まで子豚の配布やコーヒー他くだもの栽培技術の向上に取り組み、さらにRTF農家を増やしていこうという話し合いがなされている。

緑化についていえば、①コーヒー、②果樹、③チーク、④雑木などあわせて1万7,200本の木を5年間に植えた。25戸のRTFのメンバーなので、1家族当たり、3,440本の木を植えたことになる。チークは政府のものになり、雑木は森になっていく。

さてコーヒーである。もともとコーヒーはア

リカエチオピアあたりに自生し、くだものとして食べられていた。それを焙煎してコーヒーという飲み物にしていった。アフリカ周辺が原産地であるから、赤道周辺のコーヒーベルト地帯といわれる地域がコーヒーの栽培適地である。

南米、アフリカなどで国際商品としてプランテーション栽培がとりくまれてきた。主な消費地は、ヨーロッパやアメリカ、アラブ地域である。

もともとコーヒーは標高1,500メートル前後の高地の斜面で作られてきた。樹種には、陽樹とよばれる太陽の光線を好むものと、陰樹といわれるシェードのかかったうす暗い森のなかで育つものがある。コーヒーは陰樹であり、森の斜面のなかに育つものだ。プランテーションは、平場で大量生産するようにつくられていった。よく写真にみられるようなコーヒー園である。当然陽に当たってしまい、病気が多発する。

こうして、プランテーションは農業とセットになって技術開発がすすめられてきた。コーヒーは大量生産によって大衆化し、価格が下がり、農業を多用するため味は劣化していった。

2000年頃、ベトナムで大量生産されたコーヒーが、コーヒー市場に殴りこみをかけ、世界市場は一気に混乱していった。小さな森の生産は崩壊した。こうしたことがきっかけで、小さな生産者を守ろうというフェアトレードの流れがおき、①高地、②熱帯、③森林、④手摘み、⑤手選、⑥原産地表示といったものが条件とされるプレミアムコーヒーに注目が集まるようになった。

こうしてみると、ローチョ村の小さな農民が北タイの照葉樹林で育てるコーヒーは、まさにプレミアムコーヒーの条件を兼ね備えている。

1978年、ラフ族のリーダー ヤバ・ローチョは、村を拓くにあたって、村の森はきちんと残せと言ったのだ。およそ600ライの森が残された村は、森に囲まれて存在している。その森がコーヒー生産に活かしたのである。森を回復してから

コーヒーを作るのではなく、森を活かし、森の中でコーヒーを栽培し、森の回復を目指す運動にしてきたのだ。森は、いわゆる雑木や建築材などの林と経済林などくだもの木によって構成され、多様性によってつくられていくのだ。こうした開発の方法をアグロフォレストリーという。

1978年のヤパ・ローチョの発言によって、村は活かされたのだった。RTFプロジェクトが始まったとき、村長のジャットは私に、「環保珈琲無公害、老左」と中国語で書いてくれた。無公害の環境保全型のコーヒーをローチョ村で作るという意味だろう。

さて5年目に入って村はどう変わったのだろうか。インタビュー調査をした。何人かのRTF農家のことを記していきたい。

▷トバ (39才)

農地を、80ライもっている。①お茶10ライ、②水田8ライ、③10ライの畑にコーヒーとくだものをやっている。ウメ1ライ、アボカド(40本)、スモモ(40本)、柿(120本)、④コーヒーが10ライ、⑤それにおかぼが10ライである。合計38ライである。おかぼと水田は主食用であり売っていない。

トバはすでにメーズをつくるのをやめ、経営を永年作物に転換した。畑のコーヒーは森の中でくだものとの混植をしている持続型である。その他、休閑地を30ライほどもっている。彼はRTFのメンバーであり、ジャット前村長に代わって現在は村長になっている。収入は、①お茶が4万パーツ、②果物2万4,000パーツ、コーヒー5万パーツ、売り上げは合計で年間11万4,000パーツである。

▷リポ・ロチェ (54才)

80ライの農地をもっていたが子どもに20ライの農地を渡し、現在は60ライで農業をやっている。現在RTFのメンバーである。①コーヒー

10ライ、②くだもの(スモモ、ウメ、柿)5ライ、③おかぼ15ライ、④メーズ10ライ、⑤休閑20ライ。それに仔豚を1頭飼っている。収入は、①コーヒーが2万4,000パーツ、②メーズ1万5,000パーツ、③くだもの3万パーツ、合計で年間6万9,000パーツである。おかぼは主食用であり、売らない。

リポ・ロチェは、来年は、メーズを作らないという。コーヒーが育つので、将来、収入はさらに増えていく。くだものも増やしていく予定だという。

▷モディ (62才)

農地を25ライもっている。①コーヒー10ライ、②お茶5ライ、③おかぼ10ライだ。彼もメーズをつくるのをやめたという。彼もRTFのメンバーである。それに親豚を2頭飼い、子豚を年間30頭売っている。収入は5万パーツである。収入は、①豚5万パーツ、②コーヒー6,000パーツ、③お茶1万8,000パーツであり、年収にして7万4,000パーツとなる。これからコーヒーの収量が増えて、収入も増えていくだろう。

モディさんの息子が友人のリスィと親豚を4頭飼って養豚経営を始めた。彼は、現在、長い間の過労や娘を亡くした心労のため目を悪くし、いまはもうほとんど見えなくなっている。

3人のRTF農家を通して見えることは、①メーズにもはや依存していない、②コーヒーやくだものなどの換金作物を混植し、持続性を守ろうとしている、③子どもたちがあとを継ぐようになっている、④自給部分の主食をしっかりと確保している、⑤30ライ(480a)前後の農地があれば当面なんとかやっついていかれる、⑥休閑の確保問題はこれからだ。果樹の混植なら休閑は考えなくてよくなる、ということである。

いずれにしてもRTFプロジェクトの5年間の

経験は、ローチョ村に大きな転換を与えたといえる。この5年間で毎年5名の村のコアメンバーを育て、25名程度のリーダーが育った。彼らはコーヒー・くだものの栽培技術や、豚の飼育技術を身につけ、RTFの活動を通じ一定の社会関係をつくり出してきた。いまや村全体の農業が変わった。村のRTFプロジェクトはさらに5年間継続され、ダイエーさんたちの手で豚の配布やくだものの苗の配布はさらに継続されることになっている。2014年には、日本側の支援者が取り組んだクラウドファンディングによって、サイフォン方式による水道施設がつくれ、豚の衛生状況もいちだんとよくなり、コーヒー豆を水で洗うことも十分にできるようになった。

現在、コーヒー5トンほどの生産が可能であり、うち2トンはフェアトレード方式で日本との取り引きがすすんでいる。さらに3トン分についてもタイ国内でほぼ売れるようになってきている。これらの販売の問題もまだまだ課題がたくさんあるだろうが、これまでの日本との交流、コミュニケーションのなかで、彼らがつかんだものは大きいと言えるだろう。

参考文献

1. 小松光一『北タイ焼畑の村—天地有情』三一書房、1998年。
2. チャレ著、Kya leh原著、片岡樹訳『ラフ族の昔話—ビルマ山地少数民族の神話・伝説』雄山閣、2000年。
3. 小松光一「北タイの焼畑とラフ族・ロージョ村」『明治大学社会教育主事課程年報No.23』2014年。